

仮設住宅地におけるコミュニティ創出・維持・発展に関する研究 その1
—岩手県釜石市K団地に対する支援を事例として—

仮設住宅団地 コミュニティ支援 イベント
参与型調査 持続的発展 自立

正会員 ○上田 真有佳 * 同 横山 俊祐 ***
同 北野 貴大 * 同 徳尾野 徹 ****
同 三浦 沙耶 **

1.はじめに

東日本大震災後、仮設住宅の建設は早急に進められた。しかし、スピード性を伴った抽選による入居では、従前の地縁関係を考慮することが難しい。阪神淡路大震災では見られなかった、支援連絡員・談話室の設置やボランティアによるイベントの開催等の働きかけが行われているにも関わらず、希薄な近隣関係が続く事態を招いている。仮設団地内のコミュニティは被災した境遇を分かち合い、住民が癒しの段階を経て自立するために極めて重要なものと考えられる。また、孤独死・自殺などの二次災害の防止にも直結する。

本研究は、仮設団地のコミュニティへの参与型調査により、住民と寄り添い個別に一人一人の話を聞くことで、既往のボランティアなどによる一過性のコミュニティ支援や支援連絡員、談話室の設置などの制度的な支援の課題を明らかにする。住民のコミュニティ・ニーズを把握し、それに呼応する個人へのアプローチさらにはそれに即したイベントを開催したことで住民同士の付き合いや日常的な行動がどのように変容し、コミュニティ形成に繋がるかを明らかにする。

2.調査概要

仮設団地は建設戸数により、入居方法や支援の充実度に違いが見られる(表1)。地縁関係を考慮しない抽選での入居であり、年齢・家族構成にもばらつきが見られる中規模仮設団地である岩手県釜石市K町仮設団地(入居世帯数53世帯、入居者数約130人)に2012/7/5~12、7/17~26の計18日間滞在した。住民の生活、人付き合いやコミュニティに関するヒアリング・観察調査によりその実態把握をし、さらにイベントの開催による近隣関係の変化を把握した。

3.支援実態と住民との関係

1)支援連絡員:各団地に最低1人常駐し、見回りや相談、支援物資の配布等の業務を行うことで住民と行政を繋ぎ、住民のニーズへの細やかな対応が可能となった(表2)。連絡員と話すことを楽しみにする住民もあり、団地コミュニティづくりの一端を担っている。しかし平等を保つため部屋に上がるなどの住民への個人的な接触や支援は規制され、住民との間に気持ちのズレが生じている[表5 1~7]。(以下[数]は表5の意見番号を表す)

2)談話室:各団地に概ね1カ所設けられ、連絡員が管理・常駐している。イベントの開催(表4)やボランティアの受け入れが容易になった。しかし、談話室への住民の出入りは自由であるにもかかわらず、団地の一番端に設置されわざわざ行くといった印象を受ける。イベント時以外に住民が訪れることは無いため、実際には住民の居場所として機能していない[8・9]。

3)イベント:ボランティアによるイベントは平日の昼間に開催され、若い住民は働いているため参加することはなく、女性高齢者の楽しみとなっている等イベントへの参加メンバーは固定化されている[12]。また、イベントが終わると片付け等はいついせいに部屋に戻り、参加した住民同士の関わり合も無く、その場限りの活動にとどまっている。

またイベント内容も、調理方法を聞くだけ・見ているだけのもの、野菜の育て方等一部の住民だけが興味を持つもの[15]、子どもの居ない時間に子ども向けのを開催する[11]など参加者を限定しているだけでなく、一方通行の支援となっており、住民同士を繋いだり、主体的にコミュニティ活動を始める契機にはなっていない[10~16]。

4)自発的な拠り所と近隣関係の創出:料理、ペット、タバコ、俳句、折り紙、手芸、菜園等、住民はそれぞれ自発的な楽しみを持っており、何も無い団地の中で上手く時間を使うことのできる重要な方法である[17~19]。

料理、ペット、タバコのように震災前からの趣味により、挨拶や共通の話題として住民同士の付き合いへと発展しているものもあるが、ほとんどは各自で閉じた活動である。

俳句、折り紙、手芸はイベントや制度的な支援をきっかけに取り組むようになり、作る個数を競う、作品をプレゼントする、俳句を発表するなど、住民同士の交流に発展したり、仲間意識なども芽生え、生活のハリに繋がっている[20]。

菜園は近隣の人の影響で始めることが多く、家の前で行っていたものが団地内を畑とするまで発展している。育て方を情報交換したり、できた野菜のお裾分け、成長を見守る住民同士でお菓子をもち寄り自発的なお茶っ子の開催に至る、他人に水やりをお願いするなど協力関係にまで発展しており、菜園コミュ

表1 仮設団地の違い

仮設個数	100戸以上	50戸前後	30戸以下
入居方法	初期段階の抽選	抽選	地縁
イベント	大規模なものが多く	少ない	少ない
年齢層	高齢者	子育て世帯から高齢者までばらつきがある	
支援	充実している	少ない	協力し合っている

表2 支援連絡員の業務

1: 仮設住宅団地の見回り・見守り
2: 住民からの相談受付
3: 談話室の管理
4: 談話室利用予約受付
5: 来訪者の受付
6: 支援物資、各種文章の配布

表3 個人へのアプローチ方法

1: 住民の立場としての挨拶・声掛け
2: 住民の話し相手(世間話、家族・趣味等)
3: イベントへの参加
4: 住民のニーズに応えたイベントの開催
5: 子どもの遊び相手
6: 自発的な団地内整備(花壇づくり、看板づくり)

表4 イベント事例

事例	美による癒しの健康法	お茶っ子サロン	絵本カーと紙芝居	ビザづくり
開催頻度	1ヶ月に1回	3週間に1回程度	2週間に1回程度	1日限り
開催者	MOA 会員	曹洞宗青年会	ボランティア団体	ボランティア団体
参加人数	9人	約10人	2人	約15人
内容	花の1輪挿しとお抹茶	行茶活動と会話	絵本の読み聞かせ	ビザの作り方と試食

Study of creation, maintenance and development of communities in temporary housing complex part1

- Case Study of support for Complex K, Kamaishi City Iwate Prefecture -

UEDA Mayuka, KITANO Takahiro, MIURA Saya, YOKOYAMA Shunsuke, TOKUONO Tetsu

ニティを形成している。さらには従前の地縁関係で、部屋が離れていてもお互いの体調を気遣う、昼ごはんをどちらかの部屋で食べる等家族ぐるみの付き合いも見られた。しかし、それらは2~3人程度のまとまりであり、他と関わる事なく閉じているグループが多い。そのために、団地内の住民同士は、直接はしゃべらずに挨拶だけといった関係が目立つ。一方で、住民は不安や孤独を共有する相手を求めており、信頼できる近隣関係を築く必要性が伺われる[21~28]。

4.住民個人へのアプローチ

・住民個人のコミュニティニーズを探る・住民が気軽に集まり、話せる居場所を創る・住民同士の新たな関わりを生むことを最終的な目標とし、まず毎朝、連絡員と各住宅への挨拶まわりをすることで顔と名前を覚えてもらうことから始めた。そして時間があれば団地内をまわり、住民1人ひとりに声をかけた。自宅で困った事があった時や長話になる時は部屋に上げて頂き、親身に対応した。住宅の前に植木鉢を並べ、空きスペースに花を植えている住民が多い事から団地の入り口に共用の花壇を制作した。すると、住民から声をかけて頂く、昼ご飯をごちそうになる、菜園でとれた野菜のお裾分けをいただく、家族や震災、これからの夢の話聞く等の機会が増えた。

住民と調査グループとが一对一の関係を築き、日々の変化や会話の中から個人の思いを拾い上げると共に、個人で完結している取り組みを広げて協同する場(花壇)・集まるきっかけを創ることで、住民の警戒意識をとき、信頼関係の構築につなげた。

そうした住民との関わりが、近隣関係や団地に対する住民の関わり方に変化をもたらした。「イベントに参加しても、どうせしゃ

べる人も居ない」と考え、部屋から出る事の無かった住民が自らイベントに顔を出すようになった(表6 MMさん)。また、団地内に居場所がなく、県外の親戚の家に行く等、団地内での関わりを極端にさせていた住民が、調査グループ以外誰もいない時間を狙って談話室に来るといった行動から、さらに子どもとサッカーやかけっこをし、自発的なお茶っ子にも参加するといった住民との関りをもつようになった(表6 SAさん)。これらは、調査グループと個人との関わりが行動範囲を広げるきっかけ、居場所づくりの基盤となったといえる[29~32]。

5.結論

住民の生活は地縁や趣味をきっかけにつながりを作るなど少しずつ改善を見せている。しかし、型にはまった制度的な支援では、住民の細やかなニーズに十分に対応する事ができていない。住民同士で信頼できる関係を築いている人はわずかであり、その関係は交わる事なく独立しており、団地コミュニティとしては機能していない。そして、いつの間にか出来上がっていた小さな付き合いグループに入り込めず孤立する住民もおり、近隣関係へと発展するきっかけを見失っていた。そういった問題を見据えながらの1ヶ月間の細やかな個人へのアプローチは、付き合いに積極的な(仮想の)住民のような振る舞いである。そして調査グループの存在は高齢者にとってはときに娘や友達となり、子供たちにとっては遊び相手、若い夫婦にとっては歳が近い親しみやすく、今まで関わる事の出来なかった住民とを繋ぐ存在として、柔軟に立場を変化させ、信頼関係を構築した。その関係は住民の団地への意識を変化させ、自発的なコミュニティ参加のきざしや生活範囲が広がるなどの結果を生んだ。

表5 住民意見

<p>■連絡員</p> <p>1:カチンと来ることもあるの。挨拶しかしてないのにお給料良いんだってね。</p> <p>2:別な取り組みにもっとお金をかけてほしい。</p> <p>3:上がっちゃダメとか、何でもかんでも縛るなよ。</p> <p>4:せつかく顔見知りになってきた時に(団地を)変えられると、もう一回始めから、覚えられないよ。</p> <p>5:声かけ不要って言う人もいる。</p> <p>6:(連絡員に)何処から来たんですかーって聞いても答ええない。</p> <p>7:草刈りとか、お年寄りのお手伝いとか、お掃除とか、言われてやるんじやなくて、自分から見つけてほしい。</p> <p>■談話室</p> <p>8:イベントが無い限り、(談話室には)誰も来ません。</p> <p>9:場所も悪いし、狭いし。広い団地がうらやましい。</p> <p>■イベント</p> <p>10:大きな団地は結構イベントもあるし、けど、ここは何も無いの。</p> <p>11:絵本とか、折り紙とかはちょっとある。おばあちゃんたちが居ないの。</p> <p>12:イベントに来ない人も限定されて、全然来ないしね。</p> <p>13:行くとか楽しいけど、家に帰ると寂しい。</p> <p>14:何があっても行く。それだけが楽しみだもん。</p> <p>15:何かあつてみたいけど、あんまり興味ないのよね。</p> <p>16:退屈だし、面白くない。</p>	<p>■よりどころ</p> <p>17:家に居たって何も無い。起きて食べて、寝るだけ。</p> <p>18:今日はぞうさん(手芸)あと4つ。それ縫わなきゃ気が済まないの。ペーパがあるから。</p> <p>19:(菜園)とれた野菜を食べるの楽しみにしてるの。それだけ。</p> <p>20:お隣さんにお菓子作って持っていったりする。</p> <p>■近隣関係</p> <p>21:同じ集落だけで一緒に住むってのが、理想なんだけどね、そうもいかないしね。</p> <p>22:隣との繋がりが薄いから、どの地域からきたとか知らない。</p> <p>23:お仕事行かれてる方は、ほとんど家にはいない。</p> <p>24:1年何ヶ月か住んでるけど、じっくり話したって人は何人かしかいない。</p> <p>25:顔と名前が一致しない。</p> <p>26:しほらく見ないとか心配はするけど、次集まるかっていったら、無い。</p> <p>■イベント</p> <p>27:頼る人居ないもん。困った事があっても、我慢してる。</p> <p>28:車運転できないおばあちゃんとか、乗ってあげて、病院に行ったりするの。</p> <p>■参与型支援に対して</p> <p>29:話を聞いてもらって気がまぎれる。安んずる。</p> <p>30:たった1人ではるばる大阪からきて、それが嬉しい。ほかの住民もね、それを買ってると思う。</p> <p>31:1人で居るとさ、孤立してるとさ、発散する場所が無いから、話聞いてもらえてありがたい。</p> <p>32:また来てね。</p>
--	---

表6 行動範囲拡大の事例

<p>SAさんの事例</p> <p>7/20以前のSAさんの様子</p> <p>県外に親戚がいることもあって、家を留守にする事が多い。いつの間にか、団地内にはコミュニティが出来ており、孤立していた。団地に居づらいつ感じ、ますます国内旅行に行くようになっていった。</p> <p>7/21 着物を干すSAに挨拶。着物の話をする。</p> <p>姿は見かけのもの、全く会話をする事なく調査始めて2週間が経過していき、たまに、窓から顔を出し、洗濯物の着物を干している所に遭遇。変わった着物だったので褒めると、嬉しそうに話してくれた。イベントのお知らせを見て見たが、用事があると断られた。「違う日に作っても大丈夫ですよ」と誘っておく。</p> <p>7/22 談話室に訪ねてくる。表札づくりを行う。</p> <p>朝の挨拶回りの時声をかけると、今日は談話室にずっと居るのかと確認され、午後になると談話室を訪ねてきた。「誘われたし、来てみた」と前日のイベントである表札づくりをしてみたいと言った。余った材料で調査グループとSAさんだけで作り始める。「こいつののも集中できていいわね。」とご機嫌で、積極的に話しかけてくれた。</p> <p>7/23 表札の続き。作業を進めながら話す。</p> <p>表札には向日葉が好きだからと絵をかき、亡くなった家族を想い人数分の蝶々のシールを貼った。「こんなのいいのよ?」と何度も確認をしながらも、手が止まる事はなかった。作りながらポツポツと、震災で息子を亡くした話や、団地内には居場所がないためつい旅行に行きたくなる話をした。団地住民から、旅行に行く事を好ましく思っていないのではないかと考え、コミュニケーションをとるのが怖いと言っていた。将来の夢の話もした。ごんまりとしたお店を、親戚の家の近く(難児島)で開きたいし、話し、調査グループが建築学生と知ると、「設計してよ。思い出したら、プロにしてもらう安心できる。」と簡単な絵を描いてほしいと頼まれた。調査グループに信頼を寄せていることが伺えた。</p> <p>7/24 表札を住宅の壁に貼付ける。</p> <p>表札が完成したので、午前中に部屋まで持っていく。入り口で名前を呼ぶと、笑顔で迎えてくれた。ドアに貼るのは恥ずかしいと、植木鉢の奥の壁に貼ろうとする。見えないことを指摘すると、「その方が目立たないのよ」と限られていた。部屋のまわりをマリーゴールドが植えてあり、2軒となりのSAの影響で植えた事、旅行に行っているときは水やりをお願いし、SAさんだけが用がある時話すと教えてくれた。</p> <p>7/25 子ども達と目が喜ぶるまでサッカー。</p> <p>談話室の前で遊んでいた調査グループと子どもに混じりリレーをした。いつの間にか調査グループから離れ、男の子3人でサッカーをしてきた。調査グループとはなく、住民と積極的に関わる姿を初めて見た。</p> <p>7/26 自発的なお茶っ子サロンに参加。</p> <p>調査最終日とあって、多くの住民が調査グループに声をかけ、立ち話に発展していた。暑いこともあり、どうせなら日陰に椅子を運んで、シートをひいてお茶っ子しようという話になり、そこに通りかかったSAさんが参加する事になった。いままでは団地住民を誘っていたはずのSAさんも楽しんでおしゃべりしており、近隣との関わりを楽しんでいた。</p>	<p>MMさんの事例</p> <p>7/19以前のMMさんの様子</p> <p>左目が全く見えず、車なども運転できないため極端に生活範囲が狭い。身体も強くないため周りに迷惑や心配を掛けたくないと、近隣と関わらないようにしており、団地内には仲の良い人も頼れる人もおらず、団地には馴染みがなく、イベントにも全く顔を出していなかった。</p> <p>7/20 ストープ修理をたのまれる</p> <p>連絡員の方と一緒に挨拶回りをしているときに、私たちが調査グループがいることもありいつもは違う雰囲気を感じて軽い気持ちでストープが壊れてしまつてつとつと、連絡員の方は個人的な支援などは行なってはいけませんが、調査グループが対応するので、家にならさせて頂く。ストープが壊れてしまった原因は分からなかったが、電気屋に電話するなどの親身な対応により、少し打ち解けた関係になった。</p> <p>7/21 挨拶まわりの際、立ち話に発展する。</p> <p>次の日に挨拶に行ったときに、前日のお礼とともに立ち話となる。1ヶ月滞在してきたが、初めて団地への不満など長い会話となった。玄關先で話していたが話しているのが辛くなるほど話し込み、さらには玄關先に座り込んで話していたことや会話内容から、今まで団地内に1人ぼっちで大変であったこと、話し相手が見つかったことが伺える。その後も団地内で出会うと笑顔で挨拶してくれる等、明らかに顔色や対応が優しくなり、信頼関係の構築に繋がったことが伺える。</p> <p>7/22 手を引かれ流しうめんに参加。</p> <p>流しうめんは前々から告知していたのでMMさんも知っており、その日の朝も声をかけたが返事ははぐらかされた。いままではイベントに参加してなかったせいでも既存のコミュニティに対し壁を感じているようで、参加してみたいがきっかけがつかめないようであった。そこで流しうめんが行われている最中ではあったが調査グループが家を訪れ声を掛け、半ば強引に連れ出すと、恥ずかしそうに参加した。近隣の人に心配されてる事などを知り、会話に参加していた。その後のアレンジでは「みんなで食べるの、おいしいじゃない」と流しうめんに参加したことなどを肯定的に捉えており、表情も明らかであった。</p> <p>7/23 自分の話を話すようになる。</p> <p>朝の挨拶まわりの際、流しうめんのお礼とともに、左目が見えない話や団地内で頼れる人がいないと深い話の話題になった。左目が見えないため団地や近隣住民へ迷惑をかけるまいと気を遣っており、関わりを避け、孤独であるという。このことから、流しうめんに参加でき、調査グループや住民との関係が進展したことから、住民へ対する気持ちに変化があったように伺える。</p> <p>7/24 自発的にお茶っ子に参加</p> <p>いままでは断固として参加してなかった。談話室で行われるイベントにその日の朝に声をかけて誘ってみると、「なにも持っていないのよ」と確認しながら参加の意思を見せた。明らかな団地に対する意識の変化が見られ、誘ったとは言い自発的にイベントに参加し生活範囲の広がりが実現された。</p>
--	--

* 大阪府立大学大学院工学研究科 前期博士課程
 ** パナホーム株式会社
 *** 大阪府立大学大学院工学研究科 教授・博士(工学)
 **** 大阪府立大学大学院工学研究科 准教授・博士(工学)

Master Course, Graduate School of Engineering, Osaka City University
 PanaHome corporation
 Prof., Graduate School of Engineering, Osaka City University, Dr. Eng
 Assoc Prof., Graduate School of Engineering, Osaka City University, Dr. Eng